國學院大學学術情報リポジトリ

取り組みリポート
大学英語教育における学生のモチベーション向上に対する取り組み

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-09
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 小野, 雅子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002110

取り組みリポート

大学英語教育における学生のモチベーション向上に対する取り組み

小野　雅子

【要　旨】

大学の英語教育について、今後一層、グローバルに活躍できる人材を生み出してほしいという社会の要請があると思われる。

だが、あらゆる「学び」において、本人がそれをしたいという思いがないと、なかなか上達しないという部分がある。そこで私が行っているのは、学生に、自分で学ぼう、という気持ちを持ってもらうために、英語を学ぶ目的、目標、を持たせ、自分自身にとって英語がどういう意味を持つのか、英語は自分にとっては何なのかを整理させ、確認させることである。

その方法として、二つの作業をオリエンテーションで学生にさせている。その一つが、「英語と私」というテーマで、絵でも文章でも、文章だったら何語でも良いので、自由に書いて（描いて）下さい、と指示し、英語について振り返り、英語についての自分の気持ちを整理してもらう作業Ａである。これは、50～60分ほどの時間をかけて、ゆっくりとやってもらう。そのあと、自分の英語力について客観的・論理的に自己分析をしてもらい、さらに英語を学ぶ目的を考え、目標設定をしてもらう。この作業Ｂは、Ａが終わったあとの残りの時間を当てて、30～40分ほどかけて行う。その一つが、自己分析シートで、英語を学ぶ目的やこれからの目標を明らかにしてもらうために、まず、客観的・論理的に自分の英語力を分析してもらうもの。もう一つは、目標設定シートである。自己分析シートで、自分ができること、得意なこと、できないことを自己分析したら、今度は、それに基づき、半年間、更にその先の目標を立ててもらう。

これに加えて、学期の後半では、Ａと、自己分析シート確認版（授業内容に関わるもの）Ｂ’を学生にやってもらう。さらに、ここで行ったＡ、Ｂ’とオリエンテーションで行ったＡ、Ｂとの比較分析をしてもらう。

【キーワード】

ツール　　画用紙　　自己分析シート　　目標設定シート　　比較・分析

世界がグローバル化する中、世界で活躍できるような日本人を育てることが急務という認識の中で、政府は、小学校から英語を教科として学ぶようにしていく方針を打ち出してきている。同時に、国を挙げて観光立国化を目指している中、2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催に向けて外国人観光客が増えている中、英語を話すことへの一般市民の関心も高まっている。このことは、今後、一層、大学の英語教育についても、グローバル化に対応できる、また英語に堪能な人材を生み出してほしいという社会の要請につながってくることだろう。

私自身、本校以外の大学でも一般教育の英語を教えてきたが、その経験を通じて感じるのは、あらゆる「学び」において、本人がそれをしたいという思いがないと、なかなか上達しないということである。よって、英語が好きで、得意な学生にとっては、本人が英語を勉強するモチベーションを自ら高めることが出来る。しかし、嫌いだったり、苦手な学生にとっては、英語は必修科目であり、単位を取らないといけないからやっている、とい

う状態にある。まずは、英語を学びたいというモチベーションを高めるのが、一番大切である。

そこで私がまず行ったのは、学生に、自分で学ぼう、という気持ちを持ってもらうために、英語を学ぶ目的、目標、を持たせ、自分自身にとって英語がどういう意味を持つのか、英語は自分にとっては何なのかを整理させ、確認させることである。

そうした試みの一端を、取り組みレポートとして、拙論でまとめていく。

１．目的、目標を持たせることの重要性について

「グローバル化していく世の中で、世界に通用する人間を育てる」というのは、確かに目標としては素晴らしいが、やや抽象的で、具体的にはわかりにくいように思う。

恐らく、ビジネスや芸術、色々な分野で、進出していくことのできる人材を育てるということだと思われる。しかし、教えている学生で、他の科目は出来て、英語だけが苦手という学生にとっては、英語で書かれているものや話される事柄が、日本語であれば簡単なのに、英語だから、その内容までも難しく見えるという状況に陥っている。そうすると、英語が出来たら良いのに、とか、英語が出来ないとこれからの世界では駄目だとわかっていても、苦手意識や難しさの気持ちが邪魔をして、英語を学ぼうというモチベーションがなかなか上がらない。この負の連鎖の中、英語の苦手な学生たちは、袋小路に陥って、時に諦めてしまい、時にもがいているように見える。

この壁を突破するためには、どうしたらよいのか。そこで至った結論が、彼らに、独自の目標､目的を設定させることである。たとえば､自分たちが学ぶ学問と関わる英文を「読む」､その学問について文章を「書く」､それについての話を英語で「聞く」､自分の意見を「話す」ということでも良い。学問だけではなく、自分の趣味（たとえば、サッカーのようなスポーツ等）や好きなことについて「読む、書く、話す、聞く」でも良い。さらに、2020年の東京オリンピック・パラリンピックに際してのボランテイア活動での「聞く、話す」でも良い。いずれにせよ､「英語の基礎力を身につけて、何をするのか」という目標、目的の設定を自分自身でさせていくことが、モチベーションを上げる最大のポイントである。授業は、そこに始まり、そしてその目標に向けて、授業の終わったあとも、学び続けてもらうことが、一般教養英語を教える教員の役割ではないかと考えている。

２．目標設定のためにオリエンテーションでしていること

授業のためのオリエンテーションは、半年または１年間でどのような授業を行うのかという教員の学生に対する授業内容説明の場である。だが、私の場合は、むしろ、学生が半年または１年間、どのように英語に取り組んでいくのかを問い、確認してもらう場と考えている。具体的に言うと、そこでは、前述のように、英語を学ぶ意味と目的について、学

生に考えてもらうことである。

現在、國學院大學では、大学２年生、他校では、大学１年生も教えている。今の学生たちは、小学校高学年時代から英語に触れている。小学校時代には、歌を歌ったり、ゲームをしたりと遊びながら英語を学ぶという形式の授業である。そして、中学、高校と６年間、英語を学ぶ。大学１年生、２年生とも、英語に触れ始めてから、大学に入ってまた英語を学ぶわけだから、大体10年ほど英語に接していることになる。中には、幼稚園の時から英語の塾に通っていたような学生もいるので、10年以上の英語歴がある学生もいることになる。

英語に長い間触れていることは、英語が身近であるというメリットもある。しかし、人間、何かに触れている期間があまりに長いことでの弊害もある。

① 惰性に陥る可能性

小学校から英語を学んでいることで、逆に、英語が新鮮なものではなくなっている学生が多い。英語は、「話せるようになりたい」または「これからの時代には必要なもの」という意識はあるが、「勉強しなければならない科目」になってしまっている。そして、好きであろうとなかろうと、必修科目で、単位を取らないと大学を卒業できないから、やらなければならないもの、という義務的な気持ちがあり、楽しむものではなくなっている。楽しくないという気持ちで取り組んで上達するものは、恐らく、ほとんどない。

② 英語について考えなくなっている

英語は学ばなければならない科目であるがために、英語について自分がどう感じているのか、英語を使って、どうしたいのか、といったことを考えることができなくなっている。英語が得意な学生は、英語が好きなので、それでも構わないが、英語が苦手な学生は、英語は好きではない、という感覚を持ったまま、「好きじゃないけれども、仕方ない、やらなきゃ。」という状態にある。英語を好きな学生も、嫌いな学生も、英語に対する好き、嫌いの感情が、麻痺した状態でいる。

ａ．英語と向き合うことを忘れている

英語を好きな学生も、嫌いな学生も、自分が、どのくらい英語を好きか、嫌いか、また何故英語を好きになったのか、嫌いになったのかを分析することはない。その結果、これまでと変わらず、大学でも、英語を惰性で学んでいく。好きな学生の場合、それでも「好き」なので、自ら、色々取り組んでいくが、嫌いな学生の場合、「面白くない」と思いながら、単位を取れなかったらどうしよう、と、一般教養科目の英語については、単位を取ることが最大の目的になっているところがある。

ｂ．英語のイメージの固定化

自分にとっての英語とは？と考えることがないので、英語が好きな学生も、何がきっかけで好きになったとか、逆に嫌いな学生は、何がきっかけで嫌いになったといったことを考えてみることがない。そのため、特に、英語を嫌いな学生は、最初から英語が嫌

いだったような気持ちで、英語を好きだった時期があったとしても、それを忘れている。

学生たちは、以上のような状態にあるので、大学での英語の授業の初日にも、彼らは、ただ受け身的に座っている。そこで、オリエンテーションに、私が行うのは、学生たちに、自分自身と英語との関わりを見つめ直してもらうことである。

そのツール及びそれを使ってやってもらう作業内容は、以下の通りである。

A. 学生に画用紙を配る。自分で描いても良いし、隣に座っている友人に描いてもらっても良いのだが、画用紙に枠を作り、額縁のようにしてもらう。画用紙の使い方は、縦でも、横でも、斜めでも良いと、まず教示する。そして、「英語と私」（仮題）で、文章（日本語でも英語でもよい）でも絵でも、何でも良いので、消しゴムで消すことができるように、鉛筆で、自由に書いて（描いて）もらう。英語について振り返り、英語についての自分の気持ちを整理してもらうこの作業は、50～60分ほどの時間をかけて、ゆっくりとやってもらう。書き（描き）終えたら、裏に、年月日、名前、そしてこの作業をやってみての感想を書いてもらう。

この作業の目的：英語と最初に触れた時点までさかのぼり、これまでの自分と英語との関わり、或いは、自分にとって英語とは何かを考えてもらう作業である。この作業に関しては、学生に、「～しなさい」と言うのではなく、絵でも文章でも自由に書いて（描いて）もらう。このテストは、私が学んでいる臨床心理学の心理テストであるバウム・テストやSWT、風景構成法にヒントを得て、始めたものである。

バウム･テスト、SWT、風景構成法同様に、じっくり時間をかけて、リラックスして行ってもらう。所要時間は、学生たちによって差があり、早く終えてしまう学生もいれば、時間をかけて行う学生もいる。終わってしまった学生には、好きなことをしていてよいと言って、学生たちをせきたてることなく、すべての学生が書き（描き）終えるのを待つ。

［作業を行った結果］

この作業を通じて、学生たちは、自分が英語を好きになった或いは嫌いになったきっかけに気がつく。嫌いになった学生は、どこの時点で英語を嫌いになったのか、また最初から英語を嫌いだったのかを自由に書いて（描いて）いる。

この作業をすることで、英語を好きな学生は、自分の人生において英語が大切なものであることに気がつき、これからさらに英語を勉強していこうという思いを新たにし、英語を学ぶモチベーションの上昇につながる。

他方、英語を嫌いな学生の場合にも、大きな意識の変化をもたらす。英語を好きでなかった学生も、最初から英語が嫌いだったわけではないことに気がつき、本当は英語を使った仕事をしてみたかったとか、英語を使うことができることに夢を抱いた時期もあることに気がつく場合もある。また、逆に、英語を自分が本当に嫌いなのだなと気がつく場合もある。

小学校時代、遊びながら英語を学んでいる間は楽しかったけれども、中学校に入り、英文法を学んだり、単語を多く覚えたりしなければならなくなり、英語が遊びではなく、「勉強」になった段階で、英語が苦手になったという学生も多い。また高校に入り、急に英語が難しくなり、ついていけなくなったという学生もいる。しかし、英語をどう捉えていたのかということがわかることで、さらに頑張ろうと考えたり、もう一度、ゼロから英語を勉強してみようと考えたり、前向きな気持ちになる学生たちが多くなる。

以下、2016年９月26日に、英語を教えている学生のうち、オリエンテーションに出席した56名の学生に作業Ａを行ってもらい、それについて感想を書いてもらった。その感想の一部である。

・自分が普段英語についてどう思うかということを考えることがなかったので、新鮮に感じた。（史学科男子）
・改めて英語について書くことで、今英語に関して目標としていることについて、やる気を起こさせてくれた。英語だけでなく、あることについて考えることは大切だと思う。（哲学科女子）
・改めて英語と自分について考えることができたので良かったと感じている。（経済学科男子）
・英語に対して改めて考えることで、また英語を頑張っていこうという気持ちが芽生えた。（外国語文化学科男子）
・英語に対しての自分が持つ感覚を確認する事が出来て良かった。これからはしっかりと頑張りたいと思う。（法律学科男子）
・今の自分がどんな風になりたくて英語とどう向き合えばいいのか、整理することができました。（日本文学科女子）
・英語力をもっと身につけたいと思います。（外国語文化学科男子）
・もっと英語を好きになりたくなった。（史学科女子）
・前期の時は英語に対する過去の思い出を書きましたが、今回は英語を学んで将来やってみたいこと、自分の夢を書きました。英語は苦手ですが、いつかは書いたようなことを実現したいです。（法律学科男子。この学生は、前期にも私の授業を取り、後期にも受講している。後期の授業を一度も休まず出席して、熱心に勉強している。後期には、前向きに英語の勉強に取り組むことができるようになったことだけでも、英語への苦手意識を克服し、英語の勉強へのモチベーションがアップした、ということになるのではないだろうか。）
・改めて自分が何故学習するのかを意識し、やる気を引き出す良い時間でした。（日本文学科女子）
・今まで漠然としていた目標ですが、具体的に計画を立てて、目標への一歩を踏み出そうと思いました。（法律学科女子）

・改めて考えてみて、自分にとって英語はすごく大切で、一部みたいなものなのかなと思うことができました。（外国語文化学科女子）
・改めて自分があまり英語が得意でないのがわかった。（神道文化学科男子。このように書いているが、授業が終わったあとに、「外国人旅行者が多く来たりする今の時代、自分のように日本文化を学んでいる人間が、英語を話せたら、外国人に日本文化を伝えられるから、英語を話せるようになりたい。」と言ったような話をしに私のもとに来ていて、モチベーションは高い。）

学生のこうした感想を読むと、その潜在的な能力を改めて感じ、教員として、彼らの能力を上げることに貢献しなければならないという責任感で身の引き締まる思いがする。

Ｂ．自分の英語力について客観的・論理的に自己分析をしてもらい、さらに英語を学ぶ目的を考え、目標設定をしてもらう。この作業Ｂは、Ａが終わったあとの残りの時間を当てて行う。所要時間は、学生たちによって差があり、早く終えてしまう学生もいれば、時間をかけて行う学生もいる。終わってしまった学生には、好きなことをしていてよいと言って、学生たちをせきたてることなく、すべての学生が書き（描き）終えるのを待つ。
目安は、30～40分ほどである。

資料１が、このＢの自己分析シート、目標設定シートの具体例である。目標の部分のデータは、2016年９月26日実施時に法律学科女子によって書かれた回答を打ち込んだものである。

①　自己分析シート

英語についての自分の気持ちを知ったあと、今度は、英語を学ぶ目的やこれからの目標を明らかにしてもらうために、まず、客観的・論理的に自分の英語力を分析してもらう。現在、自分は何が出来て、何が出来ないのかを自己分析することで、今の段階でできることは何か、これから何をしなければならないかを自己認識してもらう。

②　目標設定シート

自分ができること、得意なこと、できないことを自己分析したら、今度は、それに基づき、まず半年間の目標を立ててもらう。特に、2020年には東京オリンピック・パラリンピックが開催されるので、それに向けての目標を書いてもらう。もちろん、先のことはわからないが、漠然とでも、先のことを考え、目標を考えることによって、英語を苦手とする学生も、まずは半年、英語を学び直してみようという気持ちになり、モチベーションが向上する。

ただ、半年と言っても、15回の授業しかないことを前もって言っておく。というのは、半年、朝から晩まで英語に触れるわけではないので、そんなに長い時間学ぶわけではないからである。そうでないと、「半年」もあるのだからと、角形レーダーチャートの折れ線を極端に大きくする学生がいるからである。

以下、2016年９月26日に、英語を教えている学生のうち、オリエンテーションに出席した56名の学生に作業Ｂを行ってもらい、それについて感想を書いてもらった。その感想の一部である。

［Ｂをやってみての学生の感想の具体例］
・英語に対して不安があるが、まずは半期頑張りたいと思う。（法律学科男子）
・かなり細かい質問だったが、自分のことがよくわかった。（法律学科女子）
・英語に対する思いについて考えることができた。（史学科女子）
・英語を苦手意識で見ていることが今やってみて改めて思う。でもそれ以上に英語が話せるようになりたいと思う憧れもあると分かった。（法律学科女子）
・自分の得手、不得手がはっきり分かってよかったです。（日本文学科女子）
・目標をあまり立てたことがないので、自分がどのようになりたいのかあまり分からなかったが、書き出してみると「やりたいこと・やるべきこと」がたくさんあってびっくりした。（法律学科女子）
・英語は大事。努力します。（法律学科女子）
・英語をもっと身に付けたいと思った。（経済ネットワーキング学科）
・文法嫌いが治って、素直に英語の勉強ができるようになりたいと思った。（経済学科男子）
・１つ１つ明確な目標を立てることで、無理なく１つ１つやっていこうと思えるようになった。（外国語文化学科）
・やることがたくさんあると思うので、着実に英語力をつけていきたいと思った。（史学科女子）
・英語をいかに勉強してこなかったのか分かった。自分自身、英語力をのばしていきたいので、ちゃんと有言実行できるようにしていきたいです。（哲学科女子）
・単語力に帰結する問題が多いのではと思った。（神道学科男子）
・自分の単語力を上げて英語力を上げたいと思った。（経済ネットワーキング学科）
・私には単語力が圧倒的に不足していると感じた。計画的にコツコツと勉強すれば英語ができるようになる気がしてきた。（日本文学科女子）
・少しずつでも英語に触れる機会を増やしてみたいと思いました。（史学科女子）
・半年間の間に英語力をもっとつけていく必要があると思い、その中でTOEIC等も受けていければ良いと思った。（史学科男子）
・ずっとやってきた分これから達したいレベルの理想もずいぶんと高いんだと知った。TOEICをたくさん受けて英語のレベルを上げたいとより強く思った。（外国語文化学科）

［作業結果の活用］
Ｂを行った結果が教員にとってどのように役立つのかについては、以下の点である。すなわち、学生は何が出来て、何が出来ないのかということを、はっきりと確認出来るということである。もちろん、学生を見ていれば、大体何が出来て、何が出来ないかはわかるが、こうしたデータを見ることで、よりはっきりと認識できる。そして、シラバスで書いたことを授業で行っていくが、その過程で、少しずつ学生が苦手としていたり、学ぶ必要

を感じているものを取り上げながら、授業を進めていくことができる。

学生から集めたアンケートを読むと、自分自身が中学・高校の時点で出来ていたことを学生が出来ていないことが、はっきりとわかる。この作業をするまで、学生たちが、「どうもこういうことができないらしい」と思っていたことが、やはりできないのだなと確認することが出来た。たとえば、筆記体を書いたり、読んだりすること、発音記号を読むことができるか、できないか、またそれらを書くことが出来るか、出来ないか、ということである。それによって、中にはちゃんと学んでいる学生もいるということも、確認出来た。

そこで、筆記体練習用紙を授業で配布し、出席を取ったり、参考資料を配ったりしている間、学生たちには、強制ではなく、自由に練習をしてもらっている。すでに筆記体を書くことが出来る学生たちは、練習をしないが、筆記体を書くことができないので筆記体を書くことが出来るようになりたいと思う学生たちは、各自練習をしている。

単語力の不足を自覚する学生も多いので、単語力増強のために、語源、単語の発音記号、その発音の仕方も教えている。

また、学生の書くチャートを見ると、学生自身の認識でも、文法力が弱いという結果が出ており、また、半年後に文法力が向上した状態を望んでいるので、授業でも、英文法を教えている。

［ツール及びそれを使ってやってもらう作業の有効性を証明にするために］

上記２つのツールを作成し、それを使って学生に作業をやってもらうことを思いついて以来、少しずつ改良を重ねながら、現在の姿に至っている。

今、國學院大學では２年生を２クラス、60余名受け持っているが、A、Bのツール及びそれを使ってやってもらう作業の有効性を証明するには、心理学の実験のように、以下のように、条件を変えて調査してみることが必要であると思っている。それには、私の教えている学生だけでは、難しい。その理由は、対象となる学生数が少ないこと、月曜日の３限と４限というように条件が異なっていることがある。

そこで、

a．より多くの学生に作業を行ってもらう。

b．同じ条件下で、この作業を行ってもらうクラスと、この作業を行わないクラスに分けて、この作業を行った学生たちと、そうでない学生たちとの差を確認する。

c．毎年のことなのだが、お昼のあとの３限とそのあとの４限とでは、同じ作業を行っても、学生の授業に対する熱心さが異なってしまう。それは、３限は、どうしても眠くなるからで、仕方ないことと思う。条件を一定にする、という意味で、４限の学生のみ、といった形での比較が必要だと思う。

d．たとえば、A、Bをやったクラスとそうでないクラスで、授業の過程で試験問題をやってもらい、その成績を比較する等の方法もあると思う。

e．もともと、それぞれのクラスの学生たちの間の能力差があり、能力が高い学生の多い

クラスと、そうでないクラスがある可能性があるので、クラス間での比較は難しいかもしれない。ただし、個々の学生が能力を向上させたかどうかの比較は、可能であると思う。

ｆ．出てきた結果を数値として、きちんとした統計にしていく。

以上のことを行ってみることに関心を持っている。ただ、ａからｅまでは、多くの先生方のご協力が必要な部分であると思う。また、ほぼ全般に、心理学及び統計の方のご専門の先生方のご協力が必要な部分であると思う。

３．オリエンテーション以外でのツールＡとＢ活用の試み

一旦集めたＡとＢの資料は、これまで学生に返却して来た。人間は、３、４ヶ月前に書いた（描いた）ことは、案外忘れているものである。そこで、学期末に、学生にそれらを返却し、それぞれの学生に、最初の授業ではこんなことを書いて（描いて）いたなと思い出してもらう。それによって、半年の目標設定で書いた目標までは到達しなかったが、最初、出来ない事柄だったものが出来るようになっていて、自らの進歩を実感する学生も多かった。

しかし、学期末に返却されて、それを確認するだけだと、それ以上の進展がない。また、人間は、目標や抱負を書いた時点では、勉強に対する意欲が高まっていても、時間を経ると、忘れがちになるものである。そこで、オリエンテーションで新たに英語の勉強に取り組む気持ちを奮い立たせた時点の気持ちに戻ってもらう「原点回帰」の必要性も感じていた。

ＡとＢを回収し、特に、Ｂを分析し、授業で重点的に取りあげた項目について尋ねる「自己分析シート確認版」を作成した。そして、15回の授業の後半で、学生にＡとこの確認版をやってもらった。

その際、これを行う目的は、自分が今置かれている状況を認識し、英語を学ぶモチベーションをアップしてもらうことなので、オリエンテーション時のＡ、Ｂと、今回行ったＡと確認版Ｂ’を比較し、自己分析をしてもうら形を取った。さらに、教える教員側が、学生のニーズを把握できるように、学生の希望も書いてもらった。

この結果、多くの学生が、初心に帰って、再び英語を学ぶ意味と価値の確認を行うようになった。

資料２が、このＢ’の自己分析シート確認版の具体例、資料３が比較コメントの具体例である。自己分析チャートのデータは、2016年12月12日実施時に法律学科女子によって書かれた回答を打ち込んだものである。なお、９月26日行った自己分析シート、目標設定シートを作成した学生と同じ女子学生による回答である。

［作業を行った結果］

以下、2016年12月12日に、授業に出席していた学生46 名にＡを行ってもらい、それについて書いてもらったコメントの一例である。

・改めて今の自分が英語に対して抱いている気持ちを整理することができました。９月時点より、少し英語力や英語へのイメージが向上していて嬉しいです。（日本文学科女子）
・ここ何年かの中で一番英語に関心を持っているのが今なので、改めて英語と私について書くことは、自分自身のやる気に繋がると思いました。書いたことは、本当になってみたい「英語と私」であり、有言実行するように、そして後悔しないように頑張っていきたいです。（哲学科女子）
・英語は大好きな面とあまり得意ではない面の２つがあるので、大好きになれるようにできることを少しずつ増やしていきたいです。（神道文化学科女子）
・少し照れ臭いようなことも書きましたが、更なる目標を立ててがんばりたいです。（（日本文学科女子）
・少し英語が近くなった気がする今日この頃です。（日本文学科女子）

以下、2016年12月12日に、授業に出席していた学生46 名に９月26日作成のＡと12月12日作成のＡの比較・分析、また９月26日に書いたＢと12月12日に書いたＢ’の比較・分析を行ってもらい、それについて書いてもらったコメントの一例である。

・前に書いた絵と比較してみて、前は英語がもっとわかるようになりたいという願望でしたが、それが授業をとおして、その願いがかなってきているというのが、自分の描いた絵からわかります。少しずつですが、英語力がついてきていると思っています。（法律学科男子）
・英語を学んできて新しい疑問が多くなったと思いました。（法律学科男子）
・語源について学んでみたい。また英語の歌なんかを聞いて、聞く力をつけていきたい。（法律学科男子）
・英語をより身近に感じられる様になったかなと思いました。だからこそ、楽しいとか難しいとかをより感じられるようになったのかなと思いました。（法律学科女子）
・英語そのものを少しずつ楽しめるようになっている気がしました。（法律学科女子）
・一授業一授業丁寧にうけること。（法律学科女子）
・英語に対する学習意欲が上がり、苦手意識が薄れてきた。（日本文学科女子）
・英文和訳と和文英訳のときに困ることが前回からさほど変わっていなかったので、しっかり復習していきたいです。ただ、全体的に見て苦手意識は減ったように思います。（日本文学科女子）
・期末試験まで頑張ります。もうそろそろTOEICなどを受けていこうと思うので、そうした試験で役立ちそうな知識があれば、どんなものでも良いので、是非教えていただけたら…と思います。（日本文学科女子）
・少しずつ前進できているのではないかと思います。大きな変化は見られませんが、少しずつ英語を好きになっているかと思います。（日本文学科女子）

・グラフが少し大きくなったな、と感じます。何も分からない！という状態から、ここができない！と、自分のことが少し見えてきたと感じました。（日本文学科女子）
・前回よりも、全ての項目で少し、あるいは大はばに成長できていました。「今の自分」というグラフも少し大きくなっていたので、成長できていて嬉しいです。（日本文学科女子）
・これまでの内容を定着させていきたいです。可能なら、僧復習という感じで、授業でさらっとおさらいしてもらえたら、と思います。（日本文学科女子）
・筆記体のレベルが上がったと思います。（経済ネットワーキング学科男子）
・日本語を英語に直すことが９月と変わらず苦手だと思ったが、他のことができるようになったと思う。（経済ネットワーキング学科男子）
・日本語を英語になおすという苦手を克服したいと思った。（経済ネットワーキング学科）
・アルバイト先に外国人のお客さんがきても、あまり話すことなく英語が話せる先輩にお願いしていましたが、今は積極的に自分から話すようにしようと思っています。少し英語に対する意識が変わったのかなと思います。（法律学科女子）
・筆記体が全然読めなかったけれど、後期の授業の間に少しずつ読めるようになったのだと思いました。（法律学科女子）
・一回一回の授業を大切にし、一語でも一句でも多く学べるようにしたいと思います。（法律学科女子）
・英語の授業が苦手になったと書いてあったが自分で考えられる所が多くなって少しその意識は薄くなってきた。（神道文化学科男子）
・分からないことをそのままにしないこと。１つでも多くのことを学んで帰ること。（史学科女子）
・初期の授業よりも、英語に対する興味が増えました。授業ではない時も、たとえば映画を見るときや、英語に触れる機会があるときに、積極的に吸収しようと思うようになりました。（日本文学科女子）
・前から筆記体を習いたいと思っていたので、楽しくできました。書くことまではできないけど、読むことはできるようになりました。（日本文学科女子）
・残りの授業も全力で頑張ります。（外国語文化学科女子）

［Ａと自己分析シート確認版Ｂ’の有効性］

オリエンテーション時の作業とは異なり、授業も後半における作業によって、学生自身が自分の目標や課題を再認識し、自分にとって今、何をしなければならないかの確認となっている。９月26日作成のA,Bと12月12日作成のＡと確認版Ｂ’をきちんと比較分析し、新たな方向性を自ら見いだしている学生の向上心と、高い能力に感銘を受けた。仮に、９月26日の時点よりも、モチベーションが下がっていたとしても、この「原点回帰」により、英語を学ぶモチベーションは、再び活性化させられたのではないかと考える。

中には、９月26日のＡと今回のＡを比較して、「前回は、英語が出来たら自分はどうし

たいかといものだったので、イメージしやすかった。今回は、英語と自分の繋がりを考えてみると、自分は英語をよく分からないものだと考えているので、それを絵や言葉で表現するのは難しかった。」（神道文化学科男子）というコメントもあった。だが、これはこれで、英語と自分について、漠然としたイメージではなく、より深く考えるようになった結果起きていることだと思われる。英語を「分かるもの」にする道のりの第一歩となっているように思う。

前述したように、Ａと自己分析シートまた目標設定シートＢの有効性の確認も必要ではあるが、同時に、Ａと自己分析シートまた目標設定シートＢや自己分析シート確認版Ｂ’を半期の授業の中で、何度か行うことにより、学生のモチベーション向上を維持し続けることができる可能性を示しているように思う。また、私の授業を、前期・後期受講する学生の場合は、何度も確認作業を行うことになれば、一年で、トータルに英語力向上の変化を見ていくことができると感じている。

４．今後の課題

以上、現時点で、画用紙を使ったＡと自己分析シートと目標設定シートＢ、また自己分析シート確認版Ｂ’を組み合わせて､学生の英語学習のモチベーション向上を行っていき、さらに、その両者をいかに有効なものにしていくかが一つの課題である。

多くの方々からご助言をいただき、ツールＡ、Ｂ、Ｂ’を、より良いものへと改良し、またそのやり方も効果的なやり方へと進化させて、学生のための英語教育に役立て、学生の能力向上にさらに寄与するようなものへと進化させていくことができれば幸いです。

ただ、ツールの精度を高めるのは、学生のモチベーション向上の一部分でしかない。実際の授業内容において、学生に、より良い目標設定をしてもらうことがあってこそ、車の両輪のように、機能していくのである。

2020年の東京オリンピック・パラリンピックの頃までには、スマートフォンなどを使って、翻訳が瞬時にできるような状況になっているということも言われている。恐らく、ただ会話をするだけなら、人間が話をしなくても、翻訳機が上手にやってくれる時代になっているということだろう。そうしたことも踏まえ、ただ英会話をする、というのではない英語力が今後一層求められてくると思う。それは、きちんと文章を書いたり、相手を説得したりできるようなより高度な英語力だと思う。機械を通しての間接的な対応では物足りなさを感じ、直接的な心からの「おもてなし」と言えるような対応力が必要とされる場面が出てくることだろうと思う。東京オリンピック・パラリンピックの時に英語でコミュニケーションをとる、という部分を超えたものに目を向けてもらえるようにすることが、広い意味でのグローバルな人材の養成につながっていくのではないか。こうした広い視野を持って、今後英語教育に携わっていく中で、学生たちに英語を学ぶより高い目標設定をしてもらうことが、自分に課された課題のひとつだと考えている。

私は、ただ英語を話すことができればよいというのではなく、英語で情報発信できる能力が重要な要素の一つだと考えている。通訳ガイドのボランティア団体でのwebsite原稿英訳、Facebookページの英語での発信、神奈川県立歴史博物館の展覧会のチラシの英訳（ボランティア）、「PADDCうつ病と抑うつ傾向の投影法心理アセスメント」（一般社団法人日本創作療法学会　推薦）の英訳、日本のポップスの英訳等、自分の関わっていることについて学生と情報共有をすることで、情報発信の楽しみを伝えたいと思う。それによって、学生が、自分は外に向けて何を発信していけば良いかといったことを考えるヒントになればよいと思う。外国語学科学生の言葉にあるように、「１つ１つ明確な目標を立てることで、無理なく１つ１つやっていこうと思えるようになった」時、学生たちもまた、新たな一歩を踏み出し始めているのではないだろうか。

資料１

2016年　　９月　　26日
No.　　氏名

１．発音記号を読むことができますか？書くことができますか？

２．筆記体を読むことができますか？書くことができますか？

３．語源（語根）について知っていますか？

４．英語の「読む、書く、話す、聞く」という作業のうち、何が一番好きですか？何が少し不得意ですか？

５．その理由は？

６．英語の文法について、どういうイメージがありますか？得意でしょうか、不得意でしょうか？

７．英語の単語についてどういうイメージがありますか？覚えるのが得意？それとも不得意でしょうか？
スペリングと意味と、どちらが覚えやすいですか？

８．英語の文章を声に出して読む際に、何か困ることがありますか？

９．英語の文章を日本語に直す際に、何か困ることがありますか？

10. 日本語の文章を英語に直す際に、何か困ることがありますか？

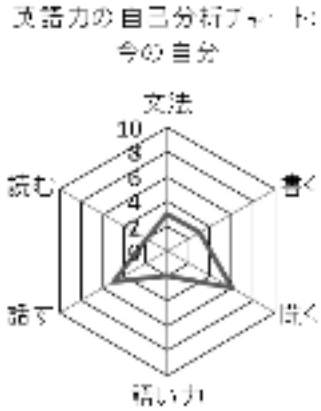
11. 英語の文章を聞く際に、何か困ることがありますか？

12. 英語で話す際に、何か困ることがありますか？

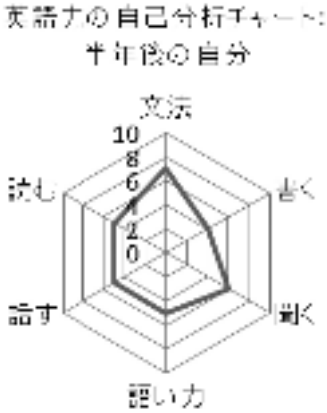
現在の英語力を数値化する・この半年間の目標を立てる。

目標：

１．今の自分



２．半年後の自分



2020年までの目標を立ててみましょう。その頃には、自分がどういう風になっていたいと思いますか？

2016年４月から2017年３月まで：

2018年４月から2019年３月まで：

2019年４月から2020年３月まで：

2020年４月から2020年７月まで：

2020年７月、８月、９月

以上の作業をやってみての感想：

資料２

2016年　　12月　　12日

No.　　氏名

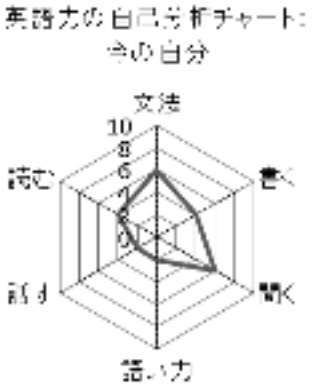
１．筆記体を読むことができますか？書くことができますか？

２．語源（語根）について知っていますか？

３．英語の文法について、どういうイメージがありますか？得意でしょうか、不得意でしょうか？

４．英語の文章を日本語に直す際に、何か困ることがありますか？

10. 日本語の文章を英語に直す際に、何か困ることがありますか？



資料３

2016年 12月12日

①　今回行ったＡの作業と９月26日のＡの作業を比べて、何か変化がありましたか？自己分析をしてみましょう。

②　今回行った英語力分析アンケートと９月26日のアンケートを比べて、何か変化がありましたか？自己分析してみましょう。

③　残りの授業で伸ばしたいことは何でしょうか。また授業で取り上げてほしいこと等、希望を書いて下さい。

An Essay on How I Try to Motivate my Students to Learn English in my Class

ONO Masako

Abstract：In learning or studying something, the most important thing is to have enough motivation to do that. In order to get my students to have such kind of motivation to learn English, I always get my students to think about the purpose or aim to learn English in the first class. During the time, I get my students to think about why they learn English, how they have learned English, and what they would like to do by learning English. I use a drawing paper and two questionnaires for this work. I have my students write down or draw what they think about English on a drawing paper. In two questionnaires, I also have my students check their English ability and write down their wishes and aim especially about studying English until the Olympic Games and the Paralympic Games which will be held in 2020.

Keywords：Tool；Drawing paper；questionnaire on the analysis of one's English ability；Questionnaire on the aim of studying English；Comparison and analysis